群 教 セ	E03 - 03
	平 14.210 集

居住地校交流の素地づくりに関する研究

- 居住地校の理解を深めるための資料の活用 -

特別研修員 小野 圭三

《研究の概要》

本研究では、保護者の居住地校交流に対する意識調査を受けて、交流相手校の受け入れ体制をよりよくするための素地づくりを行うこととした。学校間交流をしている小学校において、知的障害理解のためのパンフレットを活用し、知的障害の理解や接し方について指導し、児童の好きな遊びなどのプロフィールやコミュニケーションの方法の情報提供を行うことで、交流相手校の知的障害理解と適切に接しようとする積極的態が見られた。

【キーワード：障害児教育 交流教育 居住地交流 居住地校交流 知的障害理解】

主題設定の理由

本校小学部では居住地での交流について検討をし、保護者に対してアンケート調査を実施した。その結果、本校児童の多くは地域の人々と触れ合う機会がないことがわかった。また、交流の必要性を感じながらも、交流に踏み出せないでいる実態があった。

現在、地域の保育所や幼稚園、小中学校に通うことが、子どもにとっても保護者にとっても地域において友達を作るなどの機会となっている。本校児童には、それを補う手だてとして、児童が居住する地域での交流活動（以下、居住地交流とする）を実施することが考えられる。

居住地交流の1つの形態として居住地校交流を実施し、学校から地域へと交流の輪を広げたいと考えた。個人として参加する居住地校交流では、集団対集団の学校間交流と比べ、より細やかな個に応じた配慮が必要となる。本校児童や保護者にとって、抵抗なく、自然な交流ができるような居住地校への働きかけをする必要がある。

そこで、本研究では、1年間という期間で、現在行われている学校間交流を通して、交流相手校に知的障害について正しく理解してもらい、居住地校交流に向けてよりよい受け入れ体制を作ってもらうための素地づくりをすることにした。

研究のねらい

交流相手校において知的障害のある児童を正しく理解してもらい、居住地校交流を進めるための素地づくりを通して、交流相手校の児童に知的障害理解と適切に接しようとする積極的態度を養う。

研究の見通し

一般に障害としてとらえにくいと考えられている知的障害を正しい理解と接し方を知ってもらうためのパンフレットを活用した事前指導を交流相手校において実施し、児童の好きな遊びなどのプロフィールやコミュニケーションの方法の情報提供を行うことで、居住地校交流を進める上での素地づくりができ、交流相手校の児童の知的障害理解を深め、適切に接しようとする積極的な態が見られるであろう。

研究の内容

1 基本的な考え方

(1) 居住地校交流の定義

本稿では、居住地校交流を「一人ひとりの児童・生徒が自分の自宅を校区に含む公立小・中学校と行う交流教育活動とする。なお、盲・聾・養護学校の小学部児童は小学校と、中学部生徒は中学校と行う活動とする。（田村 SNE ジャーナル Vol.4 1999 文理閣）」と定義する。

(2) 交流教育の意義

交流教育は障害のある児童生徒にとっては生活経験を広め、社会性を養い、好ましい人間関係を育てる上で重要な学習活動である。また、交流をする健常の児童生徒や地域の人々にとっては、障害のある子どもとその教育に対する正しい理解と認識を深める機会となっている。

近年、誰もが地域でともに生きていくために生活環境を整えようとするノーマライゼーションの考えが広がってきた。健常者のちょっとした援助により、社会生活における困難な状況という意味での障害が軽減されることがある。例えば、買い物の会計のとき、店員がゆっくりと代金を言ったり、100 円とか 1000 円などわかりやすい金額を言って代金を受け取り、おつりを返すことなどがある。社会が障害のある人を正しく理解することで、こういった配慮や援助を受ける機会も増え、障害のある人にとっても意義があると考えられる。

交流教育には、集団対集団で行う学校間交流や、学校周辺地域の人々との交流、特殊教育諸学校に通学する児童生徒が個人で参加する居住地交流がある。

居住地交流の1つである居住地校交流は、交流会の後も本人に限らず保護者を含めて、日常から地域の人たちと交わる機会があるので大切である。また、個人単位で参加するので、集団で参加する学校間交流よりもより細やかな個に応じた配慮が必要である。

その一つの手だてとして、交流相手校の素地づくりをすることが考えられる。児童が知的障害に対する正しい理解と、適切に接しようとする実践的態度をもつことが居住地校交流の素地になると考えた。

(3) 居住地校交流が目指すもの

児童は就学以前、近所の人や友達、保育所や幼稚園などで友達に囲まれさまざまな刺激を受けて生活していた児童が多い。しかし本校入学後は、学校が異なることでそれらの人々と顔を合わせる機会も少なく、学年が進行するに連れて能力差も広がり、適切な援助がない現状ではなかなか関わりをもちにくくなっている。

居住地校交流では、地域を離れて特殊教育諸学校に通学する児童の「存在」や「障害や行動の理解」、「接し方や援助の仕方」を居住地校の児童に理解してもらうことを目指している。児童が近所や地域で生活しているとき、友達から声をかけられたり、遊びの仲間に入ったり、自然な関わりをもつことができれば、児童の生活もより楽しく、豊かなものになると考える。居住地校の児童から家族、さらに地域まで広がっていけば、障害のある子どもが一人で困っている状況のとき、地域の人から適切に援助を受ける機会も増え、暮らしやすい地域になると思われる。学校卒業後の生活を考えると、その意義はさらに大きくなると考える。

(4) 居住地校交流の実施状況

居住地校交流は全国の知的障害養護学校の 24.1 % で実施され、学部別では小学部で 44.1 %、中学部では 19.8 %、高等部では 8.0 % という報告がある（平成 13 年 特総研長研報告書 吉川）。

群馬県内では肢体不自由養護学校を中心に居住地校交流が始まっている。本校では、沼田分教室と本校小学部の児童が保護者の希望により居住地校交流を実施した。

(5) 居住地校交流の位置づけ

最近まで「居住地校交流」を扱う研究事例は多くはなかったが、季刊特別支援教育で居住地校交流の事例が報告されている。また、以下の交流教育についての記述は、居住地校交流を含んだ意味で使われていると理解できる。特殊教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議の「特殊教育の改善・充実について（第一次報告）」において「多様な交流の展開」「地域における交流の充実」を提言し、「盲・聾・養護学校の児童生徒等が、卒業後、家庭または家庭の近隣地域で生活するに当たって、社会生活の円滑な移行を進める観点から、これらの地域の人々との交流は意義のあることと考える。このため、家庭を取り巻く地域における小・中・高等学校等、各種団体、企業等との交流についても、積極的に検討していく必要がある。」としている。

21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議の「21世紀の特殊教育の在り方について～一人一人のニーズに応じた特別な支援の在り方について（最終報告）」（平成13年1月）において、第3章「特別な教育支援を必要とする児童生徒への対応について」のなかで「地域における体験的活動、交流活動の充実」とある。さらに「国においては、先進的な事例を取り上げた事例集等を作成・配布するなど、各学校の取組を促進し、全国的な普及を図っていくことが求められる。」とあるが、先進的な事例は居住地校交流を含んでいると理解でき、文部科学省としてもこれからさらに居住地校交流を推進していくものとみられる。

神奈川県教育委員会では「居住地交流ガイドライン」を作成し、居住地校交流を推進している。また、埼玉県教育委員会は障害のある児童生徒が居住地校にも在籍できる制度について検討を始めており、宮城県教育委員会においても統合教育に向けた取り組みを平成15年度から実施する。また、群馬県教育委員会も居住地校交流の実践による成果に期待をもっている。

(6) 学校課題としての居住地校交流

本校小学部では近隣の保育所や学校の幼児・児童、農家のグループなど地域社会の方々と交流教育を行っている。

また、以前から学部会で居住地交流について話題が出ており、平成14年度小学部経営案には「地域に根ざした教育の実現に努めるとともに、居住地交流や地域の小学校等との交流を推進する。」と明記された。

また、学部経営の努力点においても「地域に根ざした教育の実現」には、「居住地校交流を工夫して実施できるように努める。」とし、学部として実施に向けた取り組みを始めた。居住地校の児童・職員に本校の教育について関心を高めてもらうため、児童の居住地校に対して学校行事のステージ発表会と学習発表展のポスター掲示を依頼した。

本校沼田分教室では、小・中学部において居住地校となる児童生徒を含む学校との学校間交流を実施し、沼田分教室と本校小学部訪問教育部の児童が居住地校交流を希望し実施した。

2 研究の内容

- (1) 居住地校交流について保護者の意識調査
- (2) 交流相手校において、知的障害理解のためのパンフレットを活用した事前指導をし、指導前と指導後の児童の意識の変容を調査し、事前指導の有効性を確かめる。
- (3) 学校間交流を実施し、事前指導による児童の意識の変化が及ぼした行動への影響や、交流体験による児童の知的障害理解の変容を調査する。

実践計画

1 居住地校交流に対する保護者への意識調査

- (1) 調査用紙の配布（8月10日）
- (2) 調査用紙の回収（9月2日～5日）
- (3) 調査結果の検討

2 交流相手校において知的障害理解のための事前指導

- (1) 知的障害の理解を促すパンフレット「ともだちになるために」の作成
- (2) 交流相手校におけるパンフレット案を使った障害理解の授業の依頼（10月23日）
- (3) 交流相手校児童の障害観の実態調査（授業前11月6日）
- (4) 養護学校からの事前指導のための出張授業（11月8日）
  - ア パンフレットの活用
  - イ 交流児童の好きなことや遊び、コミュニケーションの方法などの情報提供
  - ウ 交流児童の顔写真と学校生活のビデオ資料の活用
- (5) 事前指導を受けた児童の障害観の変容を調査（11月8日）

3 学校間交流の実施

- (1) 交流会（学校間交流）の実施 11月22日（金）（活動の様子をビデオ撮影）
- (2) 交流会後の児童の障害観の変容を質問紙により調査（11月22日）

実践の概要

1 居住地校交流に対する保護者の意識

(1) 集計結果

記名式で実施し、配布対象者33名のうち回答があったのは28名（うちアンケート用紙以外で考え方を回答した方1名）、回収率84.8%であった。結果を表1、表2およびアに示す。

表1 地域での交流の有無

ある	6人（うち4名は「少し・ときどき」と加筆。
ない	22人

表2 地域の方々との交流の必要性

必要	12人
どちらともいえない	14人
必要ない	0人
わからない	3人

ア 保護者の考えの自由記述について

障害のある我が子を知ってほしいという意見や、自分から進んで交流するのは難しいので学校で交流教育を行ってほしいという積極的な意見が多く見られた。また、今までの生活の中で障害があるために避けられた経験やきょうだいがいじめに遭うのではないかと不安、発達の差が大きくて無理ではないか、という意見もあった。

2 交流相手校となるA市立B小学校において知的障害理解のための事前指導をする。

(1) 知的障害の理解を促すパンフレット「ともだちになるために」の作成

小学部、中学部でも使えるように、小学校低学年用 小学校高学年用 中学生用の3種類を作成した(資料1・2・3)。また、交流相手校の担任の障害観が児童の障害観に大きく影響すると考えられることから、教師用解説も併せて作成した(資料4)。パンフレットの構成は次のとおりである。

障害のとらえ方

障害のある人だけでなく、人は誰でも誰かに助けられていること

知的障害のある児童について

養護学校(知的障害養護学校)について

コミュニケーションの方法

知的障害のある児童との接し方について

道徳教育の面での配慮事項

(2) 事前指導前の交流相手校児童の障害観の実態調査結果を表3、表4に示す。

表3 障害のある人と聞いて思い浮かべる人

車イス・肢体不自由のある人	57人
聴覚障害のある人	49人
視覚障害のある人	47人
知的障害のある人	11人
老人	2人
学習障害	1人
生活に不自由や不便のある人	4人
障害に負けずに暮らす勇気のある人	1人
かわいそうな人	3人
みんなとちがう行動や考え方をする人	2人

表4 どんな障害のある人と接したことがあるか

聴覚障害のある人	69人
視覚障害のある人	14人
車イス・肢体不自由のある人	25人
知的障害のある人	2人

(3) 養護学校からの事前指導のための出張授業

ア 単元名 「榛名養護学校と交流会をしよう」

イ ねらい

A市立B小学校第4学年児童が知的障害のある児童について理解し、本校小学部第5・6学年の児童との交流活動に積極的に取り組もうとする態度を育てる。

ウ 指導方針

健常の児童が、知的障害のある児童のよさを見い出せるようにする。

パンフレット「ともだちになるために」(小学校高学年用)を活用する。

交流児童の好きなことや遊び、コミュニケーションの方法などの情報提供をし、交流会での活動に見通しをもちやすくさせる。

交流児童の顔写真と学校生活のビデオ資料の活用することで、交流児童の顔と名前を覚え、交流する児童を身近に感じられるようにする。

エ 指導計画(全7時間)

学級会活動「榛名養護学校と交流会をしよう」 1時間(本時)

総合的な学習「榛名養護学校と交流会をしよう」(交流会に向けての準備) 4時間

総合的な学習「榛名養護学校との交流会」(学校間交流) 2時間

オ 授業の流れ

担任の話聞き、本時の学習内容を知る。

ゲストティーチャーの養護学校の教師（小野）を紹介する。

パンフレットを使って知的障害について説明する。

交流児童の学校生活のビデオを見ながら、一人一人の児童について、写真と好きな遊びやコミュニケーションの方法を説明する。

交流会の活動内容を考える。

担任が授業を終わりにする。

(4) 事前指導を受けた児童の障害観の変容を調査

結果を表5、表6に示す。

表5 障害のある人は
どんな人だと思ったか

障害は誰にでも起こりうる	18人
自分とあまり変わらない	14人
楽しく交流ができそう	11人
自分との違いに気づいた	6人
手助けが必要な人	3人
かわいそうな人	3人
具体的な障害について記述	11人

表6 交流会での接し方ややりたいこと

楽しく遊びたい、接したい	12人
相手の好きなことをする	7人
なかよくする	7人
やさしくする	7人
自己紹介をしてから遊ぶ	4人
クラスの友達と同じように接する	2人
一緒に遊んであげる	2人
ルールを教えながら一緒に遊ぶ	2人
意味がわかるように伝える	2人
喜ばせたい	1人
不安がないように接する	1人
強いことを言わずに接する	1人
困ったことがあったら聞いて教える	1人
恥ずかしがらないようにたくさん話す	1人
友達になりたい	1人

3 学校間交流の実施

(1) 交流会（学校間交流）の実施

ア ねらい

A市立B小学校の児童とともに楽しく遊び、触れ合うことによりお互いを知り、理解を深める。

イ 交流会の概要

(ア) 日時 平成14年11月22日（金） 10:00～11:30

(イ) 場所 A市立B小学校

(ウ) 交流会の流れ

体育館での対面

B小校長あいさつ

B小児童代表 歓迎の言葉

B小児童から本校児童へプレゼント

B小の歌と演奏「茶色の小びん」「オーラリー」「たんぼぼ」

本校児童の歌「校歌」「あの青い空のように」

一斉活動リズム遊び「地球を回せ」

グループごとの自由遊び（各会場へ移動）

体育館で対面

本校児童代表あいさつ

本校児童からB小児童へプレゼント

本校児童退場

ウ 交流会での児童の様子

本校児童が体育館に入場する時や対面した時には、B小学校児童は背伸びをしたり、横に動いたりして、自分のグループの児童が入ってくるのを嬉しそうに見ていた。また、児童同士で確認し合う様子が見られた。交流する時には交流相手の顔と名前が一致していたようだ。

B小学校児童が体育館から校庭や教室へ案内する時には行く方向を手で指し示したり、軽く体に触れて一緒に歩いたりしていた。話しかける時には本校児童の正面に回り込んでから顔を見て話したり、名前を呼びかけてから話したりするなどの配慮が感じられた。自由遊びの場面では、見本を見せたり、遊びをいくつか提示して本校児童に選択させたりする場面もあった。積極的に言葉かけをして、わかってもらおうと一生懸命話していた。また、提案した遊びに参加せず、しゃがみ込んで一人遊びを始めたり、遊びの途中で活動をやめてしまう本校児童に対しても、そばに寄り添い見守る姿が見られた。あらかじめ計画していた遊びにこだわることなく、本校児童の動きに合わせて遊びを変更していた。以前は、B小学校児童で遊びを続けていたり、B小学校児童が集まって相談する場面も見られたが、本校児童への配慮を強く感じた。

活動に参加する本校児童はパニックを起こすこともなく、にこやかに落ち着いた表情であった。好きな遊びや楽しそうな新しい遊びを十分に楽しんでいる様子であった。

交流学年の教師からは、今までとはB小学校の児童の接し方が変わり、積極的に関わろうとしていたので、30分間の自由遊びの時間が短く感じられ、もう少し時間を延ばしたかったという反省が出された。

(2) 交流会後の児童の障害観の変容

質問紙による結果を表7、表8に示す。

表7 交流会後の養護学校児童への理解

コミュニケーションがうまくとれない	16人
障害（自分との違い）に気がついた	12人
明るい元気な子	9人
自分と変わらない・普通の子	9人
かわいそう	9人
楽しかった	6人
一生懸命がんばる子	4人
やさしい子	4人
自分のやりたいことをする	4人
自分で思ったことができない	4人
思っていたよりもできることが多い	1人
その他	4人

表8 障害のある人に対して何が
できるか

手伝う・助ける	42人
声をかけて必要なら手伝う	10人
やさしく接する	10人
一緒に遊ぶ	10人
普通の人と同じに接する	2人
あいさつする	2人

研究の結果と考察

1 B小学校児童の授業前意識調査結果の考察

A市立B小学校4年生は総合的な学習のテーマを「街のバリアフリー」とし、昨年度は視覚障害のある人を、今年度は聴覚障害のある人を講師に招いて学習をしている。また、学校に車イスを使っている児童がいたり、学年に補聴器をつけた児童がいる。そのため、質問1・2とも高い数値を示したと思われる。しかしながら、知的障害のある人を思い浮かべた児童は11名で、他の障害に比べると少ない。知的障害のある人と接した経験もほとんどないものと思われる。見えにくいとされる知的障害について、事前指導を通して理解を深めておく必要がある。

2 事前指導を受けた後の意識調査結果の考察(事前指導による児童の意識の変容)

障害についての説明により、障害をより身近に感じたようである。授業で交流する児童のビデオや写真、好きな遊びやコミュニケーションの方法などの情報提供により、未知の不安が軽減し、知的障害があるものの、自分とあまり変わらないことが理解できたようである。そして、交流会を肯定的に受け入れることができたようである。

交流会を、自分自身のことよりも知的障害のある養護学校の児童を中心に考えていこうとする姿勢が伺える。授業で説明した事柄に対応して、知的障害のある人がもつコミュニケーションの障害や新しい場面での不安などに配慮しようとする姿勢が見られる。

3 パンフレットの有効性について

パンフレットに記述し、事前指導のなかで説明したことが交流会活動中の児童の行動に表れていた場面が多く見られた。約束ごとがわからなかったり、自分の要求をうまく伝えられず、相手からの要求を理解できないことがあるため「自分勝手」「わがまま」と思われがちであることについて理解し、遊びの途中で別の所へ行ってしまふ本校児童に対して寄り添い、次の働きかけをすることができていた。接し方のポイントでは、本校児童の正面に回って顔を見て話しかける場面や肩を軽くたたいたり、遊びを始める前に見本を見せる、行き先を指差して示したりしていたりするなどの行動が見られた。

4 名前と顔写真、好きな遊びとコミュニケーションの方法について

事前指導で使った写真を教室に掲示しておいていただいたために、交流会までに本校児童の顔と名前が一致していた。そのため、本校児童に対して親近感をもち、交流会に積極的に取り組もうとする意欲につながったと思われる。

好きな遊びの情報をもとに交流相手校の児童は活動を準備していた。校舎内、校庭で準備しておいたいくつかの遊びをして、本校児童も一緒に活動することができた。

コミュニケーションの方法については、接し方のポイントを参考にコミュニケーションをとろうと一生懸命語りかける姿を目にした。アンケートにおいても苦労していた様子が見られる。「トイレ」や「食べる」「おねがいします」などの日常生活上のコミュニケーションの方法がわかっても、子ども同士の遊びの場面においてはあまり活用することができなかった。初対面の児童にとっては、言葉によるコミュニケーションが可能かどうかの事前情報としては有効であった。

5 交流会後の児童の知的障害への理解の変容の考察

実際に接してみたの感想は肯定的な感想をもった児童も多かった。説明を聞いたり写真やビデオを見たりしての理解の仕方と、実際にともに行動してみたの理解の仕方とのギャップを感じた児童も多いようである。コミュニケーションがうまくとれずに苦労した経験や、本校児童を観察して感じていたことが挙げられている。「かわいそう」と回答した児童が事前指導前は3名だったが、交流会後には9名に増加した。これは「自分や多くの人と違うこと、みんなができることができないのは、かわいそうなことである」という子どもなりの価値観の表れである。交流の体験により知的障害の理解が深まった結果であると考えられる。さらに交流を深め、対等な人間として理解できるようにしていくことも必要となろう。

障害のある人に対してできることでは、多くの児童が「手伝う・助ける」や「声をかけて必要なら手伝う」と回答している。本校児童と交流して、自分たちが配慮したことを本校児童が受け入れてくれたという実感をもてたことと、自分が手助けしてあげられことの多さも感じた結果だと思われる。また、相手に聞いて、相手が必要とする手助けをしようとすることは、パンフレット中に触れており、これは相手を尊重しようとする態度であり、障害のある人に対する理解が深まった結果だと考えられる。

「優しく接する」が多かったのは、知的障害のある人がとてもデリケートであること、健常の人以上に配慮する必要があると感じたからであろう。

研究のまとめと今後の課題

1 研究のまとめ

(1) 保護者の意識調査から

本校児童や保護者が居住地校交流を希望した場合、児童にとっても、抵抗なく、自然に交流がもて、居住地校交流を受け入れられるような事前指導をすることはもちろん、居住地校の受け入れ体制を整えるという、交流相手校への働きかけの必要がある。

(2) 事前指導の有効性について

ア パンフレットの有効性について

パンフレットに載せ、事前指導で説明したことから、交流相手校の児童によく伝わっていた。限られた時間のなかで効率よく伝えるためにパンフレットを活用することは有効であった。居住地校交流は個人交流のため、事前指導に養護学校の教師が出向いていけない場合も考えられる。そのような場合には、パンフレットの教師用解説を参考にしながら、交流相手校の教師にも同じ内容で事前指導をしてもらうことが可能である。また、養護学校の教師にとっても、指導例として活用することができるだろう。

イ 提示資料の有効性について

パンフレットの他に、交流児童のビデオと顔写真、好きな遊びやコミュニケーションの方法などの資料提供をした。これらの情報は初対面の人と交流する場合には特に有効であった。居住地校交流を実施する場合に、就学以前に地域の幼稚園や保育所に通っていた場合には、交流相手校の児童にとって、親近感をもちやすく、交流会の必然性も自然と理解することができる。しかし、新たに地域に転入してきたり、療育のため地域から離れた施設に通園していた児童の場合は、初対面となるので、今回の資料の提示は有効であった。

(3) 居住地校交流を実施する際の配慮事項

居住地校交流を実施する際には、次の点に配慮する必要がある。

ア 保護者が安心して児童を交流活動に参加させることができるよう、交流の意義について、

保護者に説明し理解を求めることが必要である。

イ 地域の実情や保護者のニーズに応じるため、実施にあたっては保護者の意向を確かめてから行うことが必要である。

ウ 交流活動に関わる授業以外でも、道徳教育において人間愛や思いやりの心を育てたり、人権感覚を高めておくことも交流の素地づくりの上でも必要である。

エ 作品交流や壁新聞などの間接交流をすることにより、居住地校の児童が本校児童に対する興味や親近感を自然な形で高めていく必要がある。

2 今後の課題

インクルージョンの流れを受けて、障害のある児童生徒が通常学級に在籍して教育を受けるための条件整備が進展しつつある。今後条件が整えば、通常学級に在籍する障害のある児童生徒が増加することが予想される。通常学級か養護学校どちらか一方を選択するだけでなく、養護学校のもつ専門的な教育的機能を利用しつつ、地域の学校で友達と交流できることについても保護者に理解してもらう必要がある。これらを両立することのできる居住地校交流の役割が重要になってくるだろう。

居住地校交流を実施するにあたっては、保護者や交流相手校とのきめの細かい手続きの方法や養護学校の教師が交流相手校で事前指導をしたり、児童生徒を引率したりするときの校内体制を検討しておく必要がある。

<参考文献>

- ・文部省 『交流教育の意義と実際』 (1995)
- ・田村 真一 『SNE ジャーナル Vol. 4 pp.96-111』 文理閣(1999)
- ・子どもの権利条約の趣旨を徹底する研究会 『統合教育へ一歩踏み出す』 現代書館 (2000)
- ・吉川 啓太 『平成 13 年国立特殊教育総合研究所長期研修成果報告書』(2002)
- ・「全障害児に普通学級籍」 『読売新聞平成 15 年 1 月 5 日』
<http://yomiuri.co.jp/00/20030105i201.htm>
- ・「宮城県内の盲・ろう・養護学校 特殊教育研修の場に」 『河北新聞 平成 15 年 1 月 6 日』 <http://www.kahoku.co.jp/news/2003/01/20030107t1136.htm>
- ・文部科学省 『盲学校、聾学校及び養護学校 教育要領・学習指導要領』(1999)
- ・文部科学省 『盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説 総則等編』(2000)
- ・文部科学省 『21 世紀の特殊教育の在り方について(最終報告)』(2001)
- ・「地域における交流活動」文部科学省 『季刊特別支援教育 8 pp.20-23』 東洋館出版社 (2002)
- ・アン・ルイス 『障害のあることない子の交流教育』 明石書店(1999)
- ・渡部 昭男・山本 智子 『鳥取大学教育地域科学部紀要 教育・人文科学 第 3 巻 第 1 号 pp.25-50』(2001)
- ・群馬県立盲学校 『視覚障害者とともだちになるために』
- ・山口 洋史他 『知的障害をどう伝えるか』 文理閣(1998)
- ・伊藤 英一、畠山 卓朗、中野 泰志、中邑 賢龍、松本 廣 『平成 13 年度高齢者・障害者用情報通信機器等開発事業 Introduction to e-AT - 電子情報支援技術を学ぶ - pp.6-21』 財団法人ニューメディア開発協会(2002)
- ・佐藤 久夫 「国際障害分類(ICIDH)改正の動向：総論」 『視覚障害リハビリテーション協会紀要, 5 pp.2-15』 視覚障害リハビリテーション協会
- ・斉藤 みお 『100 倍使えるカット集 ふだんの生活 基本アイテム集』 草土文化社